

「いのちと心を考える分科会」第9回分科会議事録

日時：2019年9月3日（火）13:30-17:00

場所：立正大学2号館12階ラウンジ

出席：石井、一ノ瀬、香川、島菌、田坂、土井、松原、横山

1. 田坂委員長から

・政府の動きが早く、科学者委員会ゲノム編集技術の在り方委員会でも提言を用意すると連絡があった旨が報告された。

2. 土井委員からの報告

・影響面の大きさを考慮しなければならない。大きな論点は2つあり、ひとつは手段と目的の逆転についてである。医療技術は、「この人を治したい」という目的に価値があり、そこから手段を考えるはずであるが、現状では技術を使わせるための議論に流れている。二つ目は、科学者の責任の取り方である。原子力を例に考えたいが、核とは異なりDIYでも広がっており影響は大きいことを考慮しなければならない。

3. 議論要点

- ・治療という言葉には違和感を感じ続けてきている。
- ・不作為は倒錯している。胚の改変は人体実験的である。すでに生まれた人にはリスクとベネフィットを選ぶことができるが、胚にはできない。仮に介入が「善」であるとすると、やってはいけないことをやってよいとなり、医療倫理を根本的に覆すことになる。
- ・科学者の役割については、研究公正、製造責任、説明責任の3つとされ、製造責任は語り続けることで責任を回収するという考え方が主流である。
- ・ゲノム編集の結果、先天異常が出てくる。それでもやりたいのかを社会に聞く必要がある。障害を持つ人の中に、自分はやりたいという人が出てくる。英国は異常だったら報告するようという指示だけで、そのあとのフォローアップまでは書いていない。これらのことから、結果の倫理から考える必要がある。
- ・医療が消費者の声を元に動いているのが現代である。主張しきるとどうなるか。中絶の権利、ゲノム編集の原理にねじれがある。実装は社会システムの一つであるのに、この日が櫃王としていると倫理と個人の価値がどうにか扱われ、混同していく。これらを解剖して哲学の役割を示さねばならない。
- ・民主主義は多数決である。7割が賛成だったらよいということにはならない。体外受精もみな反対だったけれども今では普通だよねでは許されない。ガバナンスはゼロである。
- ・ゲノム編集が組み換えでないからよいという人はナンセンスである。
- ・遺伝子組み換えは多いが行政は動物の組み換えは承認しなかった。
- ・たとえば100例のうち成功例が30例というのは、リアルな技術として使えるものではない。
- ・すでにアンジェリーナジョリーが遺伝子検査の結果で乳がんにかかりやすいことがわかり、除去手術を受けた例がある。遺伝子決定論が強い。

- ・タイムスパンは10年くらいであろう。基礎はOKで臨床は×である。
- ・人工子宮が実用になるのはだいぶ先であろうことから、女性の身体が常にゲートキーパーになる。
- ・中国の一人っ子政策により男児を望む親により女児は墮胎され、男児が多くなった。
- ・政府は特許をとるために急いでいる。イノベーションという掛け声のもと、資本主義でこれを進めようとしている。
- ・イメージ調査を意識調査とすり替えている側面がある。医学の進歩のためという言い方で、犠牲になる人は弱い人、ないがしろにされる人である。逃げられない人たちに思いを寄せる必要がある。地震予知と似ている。